

八街市協働のまちづくり検討会・中間報告

平成26年 8月 6日(金)
第一分科会(高齢者・障がい福祉)

「八街市における市民と行政との協働まちづくり実態調査」や第一分科会・各委員の市民活動および協議から、概ね下記のような現状と課題を共有した。

【現状】

- ・ひとり暮らし高齢者・高齢者夫婦世帯・日中ひとり暮らし世帯(見守り)
ひとり暮らしの高齢者や老夫婦世帯が年々増加してきており、孤独死という事例も報告されている。日頃からの隣近所の“つながり”や“見守り”が弱くなってきているため、支援が必要にもかかわらず声を出せない人やネットワークから外れていく人が増加している。
- ・元気な高齢者の居場所(居場所づくり・生きがい・交流)
高齢化社会の進行に伴い、元気な高齢者も増加してきている。「長く生きること」から「より健康的に長く生きる」というニーズ、つまりは“楽しみ”“生きがい”を持って地域で暮らし続けたいと望んでいる。
- ・地域における孤立化(安否確認・見守り・社会参加)
高齢者になると閉じこもりがちになり、孤独感や疎外感を感じるが多くなる。年齢を重ねれば重ねるほどその傾向は強く、地域との関わりや活動の機会も減少する。自宅で介護する家族、障がい者、失業による生活困窮者も同様な傾向にある。
- ・自立した生活(見守り)
従来あった家族による介護力が低下して中で、介護保険・障害者福祉制度が、地域での自立した生活を支える拠り所となっている。しかし、実際には地域で生活するためには、地域での“支え合い”“つながり”が最も重要であるにもかかわらず、その機能が弱まり希薄化してきている。
- ・虐待、DV(安心・安全)
介護疲れ、子育て、精神障害、経済的問題などの原因による家庭内での虐待は、実態の把握は難しいが、潜在的に存在し一時避難を求める困難事例もある。

【課題】

- ◆高齢化が進む中で、ひとり暮らしでも安心して暮らせる地域コミュニティ、あるいは元気な高齢者が支援を必要としている高齢者を見守り、支え、何かあった時には助け合える地域コミュニティの再構築が必要である。
- ◆高齢者が集い、交流できる場を設けることは、介護予防にもつながり、高齢者の社会参加のキッカケづくりにも大いに役立つ。
- ◆安心して暮らすためには、様々な悩み事や問題が発生した時に、早期に発見し相談できる体制づくりが必要である。
- ◆支援が必要な人を地域で特別視するのではなく、地域の一員として自治会・町内会など地域コミュニティへの積極的な参加を促すことが必要である。

アイデアA：地域コミュニティ再構築による見守り・支え合い

「防災、減災」を目的とする登録カードを地域（自治会・町内会）で作成



災害時要援護者（ひとり暮らし、老夫婦、寝たきり、障がい者等）の情報整理
緊急時の“つながり”づくりと情報の共有化



登録カード作成だけに留まらず、防災訓練も実施⇒中期目標として、防災訓練を「昼の部」
「夜の部・宿泊訓練」の二部制として実施しながら自主防災組織の結成へ



「防災、減災」という共通認識を下に、お互い協力し合い、助け合いながら安心・安全な暮らしを作り出していく ⇒この合意形成を、ひとり暮らし高齢者・老夫婦・障がい者の見守り、支え合いにつなげていく

項目1：市民活動の意識の向上

- ① “向こう三軒両隣”の重要性を再認識する⇒日頃の「挨拶」「声掛け」
- ② 防災という“命”“生活”に関わることからすれば、主体的に登録するものとする
- ③ 地域内で防災グッズを配布するなどして「つながり」をもつ
- ④ 炊き出し訓練・練習という「みんなで作り、食べる」というプログラムを演出して、地域の子どもやその保護者（若者世代）を呼び込みながら、異世代交流を進める
- ⑤ 小学校体育館を利用した宿泊訓練を取り入れることで、児童生徒・PTA・学校を巻き込み、自治会やシニア世代とのつながりを作り出す⇒楽しみながら異世代交流
- ⑥ 参加したくない人・関わりたくない人⇒知らないうちに市民活動に参加していることを丁寧に説明する（ゴミの分別、散歩による防犯協力など）

項目 2：問題・課題の共有化

- ① 登録カード作成時に「ご近所助け合い欄」を設けて、ネットワークづくりを図る
- ② 登録カードを基にした防災マップ作りを地域ごとに実施
- ③ 保育園や幼稚園にひとり暮らし高齢者や老夫婦を招き、自治会やシニアクラブが出前防災訓練を実施⇒後日、参加高齢者に園児が絵や手紙を贈り交流を図る
- ④ 担い手が減少している消防団のアピールやスカウトの場にする

項目 3：連携・支援の在り方

- ① 防災訓練に「宿泊」というプログラムを入れることで、自治会、防災課、学校関係者、PTA、シニアボランティアなど、従来にない“より現実的な”訓練が可能となる
- ② 出前防災訓練（保育園、幼稚園、学童保育所、福祉施設など）

項目 4：資源の活かし方

- ① あくまでも自治会・町内会の“向こう三軒両隣”という「近くに住んでいる人」が重要な“つながり”“見守り”の基本となる事を再確認する
- ② 元気な高齢者が、今後も地域の重要な担い手であることを考えると、人材バンク登録やシニアボランティア登録を実施して、主体的に技術・経験・能力を活かせる場を作り出す（移送支援、買い物支援、学校支援、学習支援、援農など）
- ③ 既存の公民館、コミュニティーセンターを活用して、炊き出し訓練を行う⇒この炊き出し訓練をキッカケに「食事を楽しむ会」「地元産食材を楽しむ会」などに発展させる⇒その集まりにひとり暮らし高齢者や老夫婦を招待またはお弁当として配食する

アイデア B：自由に集い、交流できるインフォーマルな居場所づくり

ひとり暮らしになっても元気で生きがいを持ち、安心して暮らせる環境づくり
要介護にならないよう、進まないように地域住民で支え合える環境づくり

↓

地域サロンを通して、健康維持・リフレッシュしながら“つながり”をもつ
地域サロンを通して、高齢者の人材発掘（人的資源）し、地域に活かす
参加者自身が主体的にサロンに関わり、共に助け合いながら運営する

↓

高齢者が“つながり”をもち、社会貢献や自分の人生、自己実現を図るための活動の場を
地域につくる⇒地域サロン、シルバーサロンの設立

項目 1：市民活動の意識の向上

- ① カラオケ、踊りなど楽しみを共有して“つながり”をもつ⇒既存カラオケ店の平日閑散時間を利用した「カラオケ大会」の実施⇒カラオケ店ポスターを地域掲示板へ

- ② 集った仲間がお互いの人生経験や知識・能力を活かすための人材バンクの設立・登録
- ③ 地域デビュー大学なる講座開設⇒無理に勧誘するのではなく、講座の魅力アップを図り地域デビューの後押しをする⇒「専門課程」「実践講座」など同世代の仲間づくり（団塊世代の男性を地域にデビューさせる試み）

項目 2：問題・課題の共有化

- ① 既存NPOの成功事例を情報共有
- ② 広報誌、ホームページによる周知⇒効果的な広報スキルを高める（文章表現の仕方、レイアウト、色使いなど）
- ③ 保健推進員、民生委員で健康に関する情報の提供しながら周知
- ④ 市内各区の地域サロン情報交換会

項目 3：連携・支援の在り方

- ① 地域の福祉施設やフォーマルな地域サロンと定期的に交流を図る
- ② 地域サロンに子どもを招待して、昔遊びや読み聞かせ、おやつ作りなどして異世代交流を図る
- ③ 自治会、町内会などの会合やシニアクラブの活動を地域サロンで開催する
- ④ 地域サロンをコミュニティカフェと位置付け、健康相談・お悩み相談など問題が深刻化する前に、気軽に相談できる場とする（一時避難の場としても活用）

項目 4：資源の活かし方

- ① 既存NPOから講師派遣やガイドブックを作成してもらい⇒欲しい情報を市民側から作り、情報を共有する
- ② 地域の空き家を活動拠点として利用できるようにして、地域の集いの場を作り、自らの経営も成り立たせていく取組⇒NPOの立ち上げ援助（資金助成、空き家対策）
- ③ 地域サロンへの外出支援をシニアボランティア（福祉有償運送）にお願いする
- ④ 外出・移送支援（買い物支援、通院支援）については、社会福祉法人所有の車の空き時間を利用した取り組みも考える⇒社会福祉法人は利潤を内部留保せず、積極的に地域に還元するという政策が打ち出されている

アイデアC：地域の一員としてのコミュニティ参加

知的・発達障害の運動支援（サッカー）をNPO、学生ボランティアに協力要請し、地域の一員としての活動や障害理解、交流を図る

↓

運動支援の活動を起点に、シニア世代にも協力してもらい学習支援や体験学習、保護者支援に広げていく（軽度発達障害と言われる子どもたちの居場所づくりと不登校支援）

↓

お互いを尊重し、異質なもの同士の交流で新しい価値を生みだし、相互理解につなげる

項目1：市民活動の意識の向上

- ① 「サッカーの楽しさを伝えたい」NPO、「新しい知識や技術を身に付けたい」サッカー部高校生・大学生、そして「運動の機会を求める」障がい児と親のコラボレーション
- ② 障がいを抱える親子のネットワーク（特別支援学校・特別支援学級）と地元サッカークラブに所属している子どもの友人のネットワークを活用
- ③ 大学生ボランティアの発想からでたフリースペースでの活動の実施（ダンス、パソコン、鉄道関連）⇒学校という概念を外した居場所での活動（シニア世代とも交流）
- ④ 人材バンク登録しているシニア世代の力を借りて、学習支援や農業体験につなげる

項目2：問題・課題の共有化

- ① 知的障害、発達障害など目に見えない障がいを知らない人が多いことから、市内各地域でミニフォーラムを開催
- ② 子どもが集まるコンサートと連動して障害に関する講演会を開催⇒ 催し物を楽しみながら、障害理解や相互理解を進める
- ③ 市内特別支援学級・合同発表会にシニアクラブや婦人会などを招待して、地域の一員としての活動や学習発表を参観してもらう

項目3：連携・支援の在り方

- ① 大学生や高校生のサッカー部員という若き世代との交流の場を作り出すことで、サッカー以外との交流の場を作り出せる（ダンス部、演劇部、合唱部など）
- ② 障がい者の特性と学生ボランティアの主体的関わり（得意なこと、好きなこと、やりたいこと）とのコラボレーションで理解と交流を図る⇒ アニメ・マンガ祭りの企画、広報、運営⇒駅前空き店舗、大型スーパースペースを活用し、アニメ好きの親子を巻き込んで相互理解に努める
- ③ ダンス・演劇などの活動発表の場として、老人ホームや保育所などを訪問する（人から感謝される経験をすることは、自信回復や自尊感情を高めるだけでなく、核家族で失った人間関係を回復するキッカケにもなる）

項目4：資源の活かし方

- ① 既存のサッカーNPOを活用することで、活動の窓口を広げる⇒若者世代との交流
- ② 自立支援協議会から助成を受け、活動領域を広げる
- ③ 学校資源を有効活用して、全ての子どもたちの放課後支援をする（障がい児や不登校児を含め）⇒シニア世代の経験や能力を活かして、学習支援・運動支援・体験学習を実施⇒6年生までの学童クラブ構想 ※学習支援については、ひとり親世帯には大きな支援となる
- ④ 既存の障害者団体が、障害種を超えて“つながり”をもち、「障害のある人もない人も、お互い“ありのまま”“対等”に暮らしていきましょう」というノーマライゼーション

を八街に根付かせる活動をする

アイデアD : 「まちづくりコーディネーター」的役割をもつ協議会の組織化

地域課題について考える勉強会を開催しながら専門性を高めていく



地域を実際に歩きながら、地域課題について自由に討議し学び、実践する



体験的「学び」を通じて、「市民に情報提供」⇒「地域課題の抽出」⇒「ネットワークづくり」という一連のプロセス理解し、まちづくりをコーディネートしていく



協働まちづくりセンターの設立

現在ある八街市協働まちづくり検討会議をスリム化し、“協働まちづくりセンター”として組織化する⇒「自分たちの地域でも自発的に、主体的に“まちづくり”をやってみよう」という機運をリードしていく

以 上

(文責 長谷川正幸)